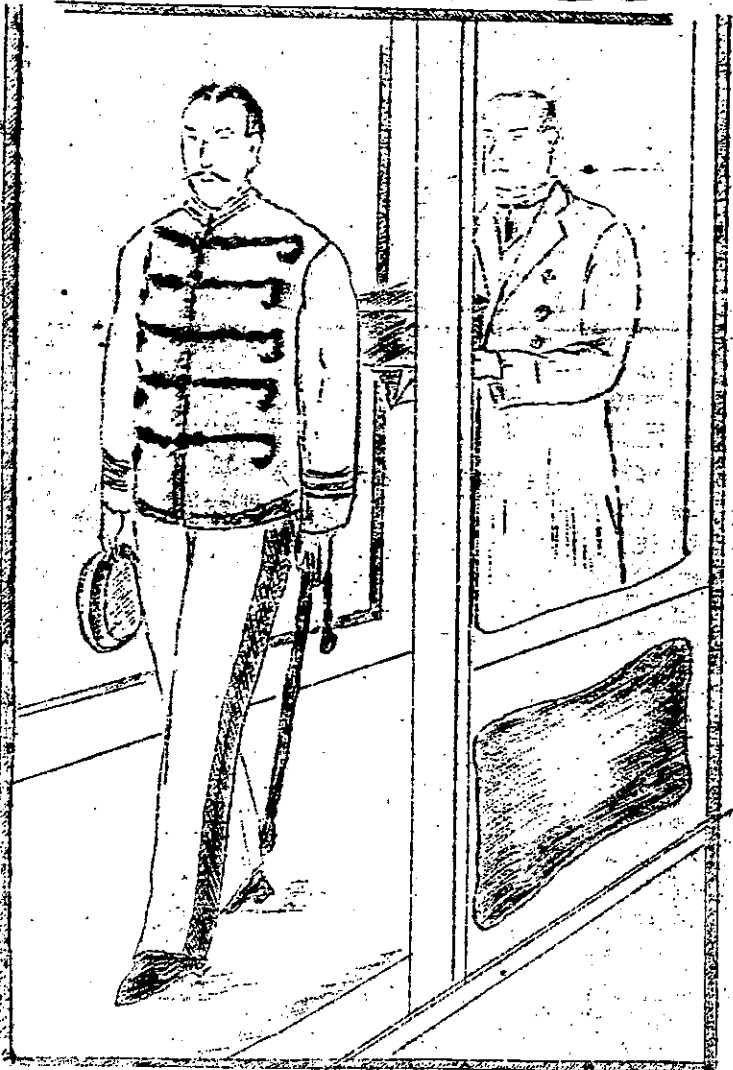


赤い鳥  
第百六十六号

勅育語受退出之光景  
明治二十三年十月十三日



左山縣總理大臣 右吉川文部大臣

2420

1 3 9 6 6  
 6 0 0 0 0  
 5 3 5 5 2  
 4 5 4 4 0  
 4 4 4 0 0  
 3 3 3 5 2  
 3 3 3 5 0  
 3 3 3 5 0  
 2 9 6 0 0  
 2 9 1 0 0  
 2 8 3 0 0  
 2 8 0 0 0  
 1 8 0 0 0  
 1 8 0 0 0

夫子大司ケ子清ノ子也米久ノ隆男子子  
 国本高亮ヲ光スエノ子也米久ノ隆男子子  
 田山津沢村山田山滝橋田高井田崎ス沼山池崎  
 福奥若小木沖和奥藤永日石毎磯イ浅冲菊高

第一回 蠅取成績

余川ハナ 2000  
 木村タケ 2000  
 横山弘之 2000  
 浅沼敏一 1810  
 浅沼雄 1800

第二回

子代信子 7600  
 山ノ子 5750  
 文子 5500  
 山ノ子 4800  
 山ノ子 4740  
 山ノ子 4600  
 山ノ子 4310  
 山ノ子 3050  
 山ノ子 3000  
 山ノ子 3000  
 山ノ子 2900  
 山ノ子 2900  
 山ノ子 2835  
 山ノ子 2530  
 山ノ子 2520  
 山ノ子 2400  
 山ノ子 2300  
 山ノ子 2250  
 山ノ子 2164  
 山ノ子 2050  
 山ノ子 2033  
 山ノ子 2016

一ネンセイノツヅリカタ

◎ シマカハ ヒロキ  
 ニチエウビ デス  
 ホクハ アサ六ジゴロ オ  
 キマシタ ソシテ カイガン  
 ハ イキマシタ  
 ナヨウド アサヒママ カラ  
 オヒサマ ガ キラキラ ト  
 ノホル トコロ デ ホントニ  
 キレイ デシタ  
 ソシテ ウミガ シツカ デ

シタ。ソシテ カヌーガホ  
 ヲカケテ ニツミツミナト  
 ノソトヘ デテ イクノダ  
 ホクハ ウミヲ イツマデモ  
 ナガメテ マシタ  
 ◎ イシツ ミチマス

ボクノ イヌガ 一ヒキキ  
 マス。ソノ イヌハ ホチト  
 本ヒマス  
 ボクガ  
 本ナ

トイフトボクノソバヘ  
ヨツテキマス。  
ホチハエサガホシクテ  
オキマシタ。ボクガエサ  
ヲモツテクルトホチガ  
キマシタ。ホチハヨロコ  
ンデタバマシタ。

◎ ナガタカウキチ

ワタクシハウチノトリ  
ゴマニイッテミルト  
ウチノトリガタマゴ

ヲ五ツウミマシタ。  
アトカラオトウトガキマシ  
タ。ニイサンモキマシタ。  
オトウトノパンヲニイサ  
ンガトリアゲマシタ。  
ダカラワタクシガオコリマ  
シタ。

◎ コラレ

トオドカシマシタ。ニイサン  
ハビツクリシテニゲテイ  
キマシタ。ワタクシハオトウ  
トトナカヨクアソビマシタ。

◎ ヤボリヒロシ

キノフノアサ四ジハンニ  
オキテサウシテカホヲ  
ソツテソレカラハトバニ  
ソリニイキマシタ。  
サウシテハトバデツツテ  
キマシタ。サウシテアジ  
ヨトイヒマシタ。  
五ヒキツツマシタ。サ  
ウチハカヘツテゴハン  
ヲベテガツカウニキマシ  
タ。

◎ オクヤマキミユ

キノフオカマサンカ  
センタクヲシマスカラ  
トモチマンヲツレテダイ  
ソングウママヘアソビニ  
イキオサイ。  
ワタクシハスグイキマシタ。  
サウシテアソンデキルト  
オトウサンラガアキバサマ  
ノオウチマヤネヲ

「エンタレ エンシマ」

「オモサウニ カツイデキ」

マシタ。

「サウシタラ ユキヲキヤン」

ホツテ

「キミキヤン」

ト ヨビマシタ

モ トモキヤン

ギヲキヤン

ツテ イツヂ

ソビマシタ。

◎ オカタヒサコ

「ワダクシハ ミンナ デユミ」

「キトニ イキマシタ」

「ユミナトハ キレイ デシタ」

「オヨギマシタ カハ デモ オヨ」

「ギマシタ カヘルトキ ダルクテ」

「オククシヲ トコ デ」

「カヘリマシタ」

◎ ハジメテ ノツツリカヲ タイヘン ヨク

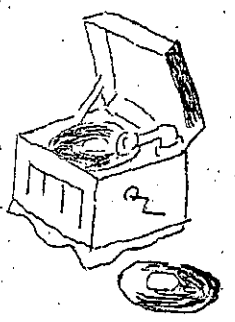
カゲマシタ ココヘヘードニ タクサンノ

セラレマセンカラ フレカラ ジョウジツニ

ミナサンノヲ ノセルコトニ イタシマス

# ヨ尋ニ

## つゞり方



ちくおんさ

渡辺 三朝

この間のかねでぼくのうちへ子どもレコードが来ました。ぼくはちくおんさが何よりぼんたのしみです。今日もまた学校が終わるとすぐにちくおんさをするつもりです。きのふすみちやんとちくおんさをしなるとおると、そこへえつちやんやまきやんが来たので、

「えつちやん、ちくおんさをしてあそばし」といふと、えつちやんは、

「うん、はいちやん、はいおくれ」といふたから、ぼくはきしやぼつほのやいさく

をきしてやりました。えつちやんとまきやんは、じつとしてよく聞かれました。それ

から、まきやんはちがねたので、ぼくとす

みちやんはおくのへやでじづかたしてあそびました。

かきかた

浅沼 正夫

きのふ、私がかきかたをしておると、おにいちやんが学校からかへつて来ました。私は、しやうけんめいかいでおました。夕といふじは、うまくいきました。ぐのじもよくいきました。あと、ついでみんなうまくいとき急なうしろから、「わつ」とだれかがいひました。私はびつくりして、ふでを動かしました。そのついでに、ひつくりかへつてしまひました。

「だれだい」といふと、「ぼくだよ」といふから、見るとおにいちやんでした。私はおにいちやんがくやくしくやくしくたまりませんでした。またかくとへたにかきました。今度は手本とにらめっこをしてかきました。かみんはうまきはかきませんでした。

「今度は」と思つてかくと、それは少しうまきかきました。また一まいついでかくと、それは

うまくかきました。私はうれしくてたまりませんでした。それを學校に出しました。

■あかちゃん 奥山友子

この間の夜あかちゃんが生まれました。その時私はおりました。「おぎゃあ、おぎゃあ」といふこゑが、きこえて来たので、私は何だらうと思つて、目をさましました。さうすると赤ちゃんが生れておりました。私はびっくりして赤ちゃんのそばへ行きました。

さうすると、おかあさんが私のことを呼んで、「この赤ちゃんは私のかほにそっくりだ」といひました。「あら、さう」といひながら、私はうれしく、とびまはつたりをどり上つたりして大よろこびしました。

■赤ちゃん 小林 資子

目がさめました。私は、「あら、ねむいねむい」といひながらおきました。かやから出ようとしたら、おとうさんが

「赤ちゃんが生まれたよ」といつたので、私は「女の子、男の子」と聞いたら、おとうさんが「男の子だよ」といひました。私は

「あら、男の子なの」といひながら、赤ちゃんのおざしきへ行きました。

さうして、しやうじをうつとあげて、ちまつと赤ちゃんを見ると、かはいくそ、おたまは丸くて目はつぶつておりました。私は、「まあ、かはい、赤ちゃんのこと」といひながら、しやうじをまたうつとしました。

さうして、おはんをいたゞいてから學校へ行きました。私は學校でも赤ちゃんのことばかりかんがへておりました。學校がしけると急いで家へかへて、かばんをしまつたまま、赤ちゃんの所へ行きました。赤ちゃんはまだ生れたばかりなので、わらひません。だから私はつまらないです。早く大きくなればいゝと思つておます。

● ナツウタフネノハフユ泣ク。アマダレ石ヲウガツ。

尋常三年生の綴方



雨降り 堀口保信 それからあとの雨ではあふれな

おと、ひから降りつゞいた雨が

川に一ぱいたまつた川があふれ

て家の中へ水がはいつた 大風の日 うちわとりが死にました

僕はいそいでかばんを取つて棚

へあげて逃げた、そのうちに水は

ひいて来たから家へはいつてか

ばんを見たらぬれていなか

つた、母さんはどんなにかかなし

さうに、時々「けつこ」とな

いて、その時向ふから大風がこつちの方

へやつて来ました。私はすぐに  
 とりのところへいざを飛ばせて  
 やりました。とりはよろこんだ  
 やうに「けつこ」といきました。  
 私はほんとはかわいらしくてた  
 むりません。

せみとり 加賀谷 肇

この間おはかにせみ取りにいっ  
 た。僕が一番先に行った。だん  
 くおくへいくとせみもたくさ  
 ん居る。せみを逃がした時は水  
 のやうなものをさりのやうにち

り〜にして逃げて行く。取った  
 時にはふくろが少し持ち上るやう  
 なきかする。男せみなら取った時  
 に鳴くけれども女せみなら鳴かな  
 い。たゞはた〜するだけだ。  
 だからせみ取りはおも白い。この  
 間は十五匹取った。



尋 田

の 綴 方

あぢとり 田崎 文平

くった〜 あぢがくった。  
 しめろぞ〜 気あぢだ  
 にかすな〜 つり上げろ  
 くうぞ〜 せんなつれ  
 くった〜 又くった  
 あげろよ〜 にかさぬ様に  
 あとから〜 人のこゑ  
 まけるな〜 せういそげ  
 今日 大りやう 大たりやう。

光代 西村 美代子

私は光代が大すきです。学校へ行く  
 時とかへつて来るときはいつもものやう  
 に島村さんが、だつこしてきます。

学校に行くとき「おちやん、あべよ」とい  
 ひますと逆きます。又学校からかへつて  
 「おちやん」と呼ぶとよるこんで来ます。  
 「おちやんはおりこうだから、先ッチ〜  
 をしてごらん」と言ふとすぐします。  
 光代は私の妹で一番下の子です。かわい  
 がるので、私は美代子と會ふたびにけん  
 くわ互します。

さんばつ 藤滝 一郎

昨日学校からかへつて来てお母さんが  
 「さんばつして上げやう」といひました。  
 僕は「バツ」と答へた。バリカンを持って  
 来てお母さんは「あかが一ぱいある」といひま  
 した。

ミリぬき

佐々木 千三

昨晚すぢちやんときりぬきをしました。すぢちやんの切ぬきの着物はたくさんでミリぬきに出来ていました。私もあんなきれいな切りぬきがほしくなりました。

しぼりくしてから「もうよさ」とすぢちやんがいのました。私は「うん」といってきりぬきの箱をしめたました。そして梅屋しをもつてえん台の上へねてあそびました。二人で話をしておさんであたり「おばさんが「ヨミズ」とよんだから「存んだ」とよみます」と「梨て肩また、け」といひました。

二ほろぎ学校

横山 セツ

二ほろぎ学校である。台所へ水をのみに行くとき、二ほろぎで海をみました。そのとたん、手の上にはよい何かのつかつた。私は二ほろぎで、二ほろぎの二ほろぎと二ほろぎ

- △ いそいで手の上のものを見ると一匹の二ほろぎ
- △ であつた。つかまへやうとするよんよんと
- △ んでにけた。私はつかまへてもあつかけた。
- △ どういふつかまへた。三子つかまへた
- △ よいといふと「おたいにおくね」といった。
- △ えんの下をのぞくと「たのしやうに鳴いている
- △ じつとその音をきいておると「かんころちんこ
- △ こ」と一匹の二ほろぎがうたふ。もう一匹の
- △ こほろぎがおどる。その二ほろぎは小さかつた
- △ あれは生徒でせう。大きなこほろぎは子供の
- △ することをしている。急におどろいてにげ出
- △ した。私の見ているのに気がついたとみ
- △ へる。といつたら「お母さんが「何をいつてる
- △ の早くおぼしめしたので「ねどこにはいつた
- △ が「思ひだされてなかつた。ねむれたかつた。



### 尋五の綴方

エチオピアと日本

後藤 茂義

エチオピアとイタリとは此の間から戦争が始まつた。エチオピアの兵士は皆はだして勇ましく戦つて居る。それを思へば我等はなんでも日本も今は非常時だ。近い内にとこの國が日本に戦争を仕かけるかも知れない。そこにでるべく熱心どはやつたら日本の兵士はたをれるばかりだ。我等は蚊やハエを取り悪い病氣をふせいで小笠原を守らう。

朝の海

山下 高市

朝早く起きて見ると一番先に眼につくのは波止場の燈台でした。その向ふには青い海。私はすつかり眼がさめました。すつきに行くと人夫達をのせた船が走つて行きます。又所々にあはまつる舟が浮んで居ます。後のやまからせみのこえがきいて来て来ます。波止場にはところ／＼に人影が見えて来ました。朝はほんたうに景色がよい。

一年生の書方

田代 妙子

うちの照子は一年生です。此の間の事、照子のかへりがあんまりおそいので、つとこのされて居るんぢやないかと話して居る所へ照子が笑ひながら息を切らしてかけて来ました。どうしたかときくと「今日あたいの書方、全部まるだよといはつていひました。母ちやんが河此を見せてごらんといふと、それは上手に書いてありました。次の書方の時には太くて下手だつたので私はころけまはつて笑ひました。細の一年生の時にもきつとこんな字を書いたんだねといふと皆で笑ひました。

大風

小宮 山キヨ子

昨日大風が吹くとめちやんが言つたから私はほんとは吹くのかとときいて「したらとめちやんはおきつて吹くつたら、ふくよといつた。私は心配になつた。父ちやんが仕事かうかへるのを待つて居た。すると間もなく雨がふりしよめれた。なつてかへつて来た。私は表に出で、父ちやん風が吹くつと云つたら父ちやんは「さうかといつてふるばへ足を洗ひに行

つて来てから戸をしめはじめました。そこへ信  
さんが来て大した風はないといつたから私はや  
つと安心しました。

●私ねずみです 縮田すき江

或夜の亭舎所のたなの上で二三匹の友達とあそ  
んで居ると「ニマオ〜」と云ふこゑがきこえまし  
た。ヤッ猫が来た〜と私達は身をちぢめまし  
た。みんなあはて、にげ出した。どこへかくれた  
らよからうと私があたりを見まわした時にはも  
うだれも居なかつた。すると「さう食つてやるぞ」と  
猫があらはれた。私はにげやうとしたけれど足  
がふるえてにげられなかつた。私はたすけて〜  
と云ふと猫は「まれれ」といつてめを光らせた。その  
時うしろから一度に五六匹のねずみが猫にとび  
ついた。猫はびつくりして「ドン」とたなから落ち  
た。私たちはその間ににげた。私は「みなさんありが  
たう」と心からおれいを出した。

●夢 重田實

私は或日勉強してゐるとだれか「おい、みのぢや  
早くおいで」と云ふこゑがした。外へ出て見るとそ

れは勉強だつた。「こんど日にきよせから西町  
まで何した来たんだらう」ときくと、勉強は「の  
前のかたさ」といつて私をぶつた。私は「何を、こ  
んちでしよう」といつて頭をぶちかへした。その  
時「う」と大きなこゑがした。眼をあくとそれは

お父さんの頭をぶつてゐた。

●夢 奥山登喜子

夕方私が海岸の砂の上をだん〜と歩いてお  
寺の所に行く。一枚の大きなきりの葉が岸に  
あがつて居ましたので海の中へ入りました。  
するとそのはつばが「おのりなさい」と言ひまし  
たのでだまつて乗ると、波が来てはつばを私と  
一緒にひいて行きました。  
だん〜とひいて行くうちに大きな岩があつ  
て、そこにぶつかりました。はつとしてそのはつ  
ばにつかまらうとする。夢が破れて、私は一生  
けんめいに枕につかまつて居ました。その時は  
まだまつくりでした。

# 尋六ノ綴方(一)

夢入此の重艦 佐々木 繁

僕の手入は重艦です。とんすうは三万三千八百  
との重艦です。四十煙砲は二門です。れども僕の  
おやが隣のおやまでしかとびませぬ。二十煙  
砲が四門です。それには鉛筆の大砲が二門。金巻の  
大砲が二門です。解の善代三艦にはまけなはいと  
思ひます。がせんすい艦があるからまけるかも  
しれませぬ。戦争は日本海を行ひます。その時は  
善代三艦を沈めてやらうと思ひます。が善代三  
艦は兵士も一生けんめいだし重艦もがんじよ  
うに出来しおちるからまご〜すると負けさう  
です。僕の重艦はもう古いから敵の一たんを受  
けたらやられます。それでもまげませぬ。僕は部  
下を可愛がつてよくく〜れんし。太平洋方面の  
荒波の中で艦練習をして重艦練習をあげる時は  
茶しと練習しりつば重艦にしたいと思ひま  
す。

愛子さんのお母さん 高崎輝子

あんな丈夫さうな愛子さんのお母さんが死ぬと  
は思はずなかつた。それだのに此の間お書から私  
があつた時、藤川先生が石井愛子は居ませぬかと  
いつて来た。私はそんなに愛子さんのお母さんは  
悪いと思つて居ませぬ。むしろ先生が愛子さんを  
呼びに来た時、藤江さんは私をやらめて胸をおさ  
へながらいせおねえといつた。私は愛子さんのお  
母さんがびどんはつたのに気がついた。もう心配  
で心配で私縫も出来なかつた。皆も私達も助かる  
やうにわがわがめまかつたねといひ。又今からおか  
ねばといふ人もある。私縫が終つてから家へ歸つ  
た私は尚も愛子さんのお母さんが死ななけれは  
いねえと思つた。がその時はもうおせいとみえて  
とう〜その日に死んでしまつた。愛子さんはど  
んなに悲しいでせう。私は考へると愛子さんが可  
愛想でたまらな  
お願ひします。皆さん愛子さんさうくと慰めてあ  
げませう。そして冷までとりま〜つと〜仲よ  
く遊ばせう。



母の死

石井愛子

母はなぜあんな病氣になつたのせうか

私か母と呼んだけい

あゝもうだれだと思ひ切り

だんだん一人になるばかり

右前一つ叫びませう

何か言ひたい事はなにかと聞いたけれど

私はだれだと言ひつゝかわとくり返すばかり

白色ほだんだん変り行き

どうきは早く来るばかり

へんは頼したと思つたり

終に眼をとぢた

来る人々はどうして

こんな丈夫な人が死ぬと休

皆ためいきや涙やら

私は電氣です

花口芳朗

私は電氣です。私を電氣とせよ。私は世界にあらはれてお  
まをせしで暗く、夜を照らし居る。然し夜  
を照らすものは電球さんと共同でやる仕事  
です。電球はアイロンや機械などを動かしてある  
すが、時には停電したり、私達には何の工人が死  
ぬことがあり、あらしの時などは電線が切れて火  
事を起したりしますが、時には消防隊が直ぐ  
にかけつけて来て消し止めてくれ、私達の心  
で、私達が私はまだ一度も火事などを起したこ  
とは有りません。私達は今東京の或電氣會社で起さ  
れて方々の家々へ送り出して行きます。私は送られ  
る時に上つては食之人の家へ行つたり、金持の家  
へ行つたり、貧乏の家へ行く。私達は送られて  
とドロネギが入つて来てダンスを二じあげて着  
物をぬすんで行き手した。私は電球さんと話し合  
つて早くこの家の人が歸つてくれればよいと思ひ  
ました。

### 尋六兒童創作劇

遠足 西村静江

人物 輝子、かつ、淡子

時 現代

輝子が二人は野原で美味しきうにノリマキ  
を食ひてゐる。二は淡子が向ふから澤山花を  
持つてきて来る。息をはずませながら、  
淡子「あそこは澤山きれいな花があつてよ」  
輝子「さうと取りに行きませう」  
二人はすぐ行くことにする。

淡子「おれよ、今行くつもりだ。おれが輝子を  
つておれしをぶどうとしにの心を、おれし遊んで  
来たのは」  
輝子「おれちやよしませう」  
かつ「おれちやよしませう」  
淡子「おれちやよしませう」  
かつ「おれちやよしませう」  
輝子「おれちやよしませう」

輝子「おれちやよしませう」  
かつ「おれちやよしませう」  
淡子「おれちやよしませう」  
かつ「おれちやよしませう」  
輝子「おれちやよしませう」

そこで三人は寝てあんで本を読み始めた。  
淡子「輝子やん、あたしナイタンゲール大好きよ」  
輝子「おれ」

淡子「あたし犬はきりむだけれども犬が傷をし  
つて本を著いてあるわよ。だからあたし情深い

人大好きよ。輝子やん、おれ」

輝子「おれ、あたしわからない」

淡子「おれ、あたしわからない」

輝子「おれ、あたしわからない」

二人は一生懸命にさがし始めた。少した

淡子「輝子やん、おれ、あたしわからない」

輝子「おれ、あたしわからない」

淡子「おれ、あたしわからない」

輝子「おれ、あたしわからない」

二人はかつのおれ、あたしわからない

二人はかつのおれ、あたしわからない

かつ「おれ、あたしわからない」

淡子「おれ、あたしわからない」

輝子「おれ、あたしわからない」

二人はかつのおれ、あたしわからない

三人は元氣よく元の場所へ歸つた  
かつもう歸りませう」

「御子様を」

二人共歸り支度をす

「御子、もう一度お出なせう」

「御子、歸りませう」

三人は一団、たつしを前へお出なせうから、

しつと、お出なせうした

「御子、お出なせう、いいね、二人にはお二人、花を」と

「お出なせう」

「御子、お出なせう、少しお出なせう」

「お出なせう」

「御子、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう」

「お出なせう」

終

朗かな兄弟 石津岩子

秋はれがよい日、ピナ公といふ十才の男児と、  
オニ子といふ、鹿の間から外をながめておまて

ピナ公「お、宿題があつた、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

ピナ公「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

オニ子「お、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

「お出なせう、お出なせう、お出なせう」

終

産物掘り 沖山茂子

でこの坊、井上善美

母おたけ、浅沼久子

デコ坊、大がわん、ほろりでおちいさんかそ

こを掘つて見ると産物が澤山出てきました。

ときかんに本を讀んでゐる。

デコ坊「お母さん、これ本當の事」

母「本當の話よ、デコ坊、ちやんと行つて裏の畠を

掘つて、この人きつと、澤山の産物が出て来ませうよ。

デコ坊「お急いで小屋から、お出なせう、お出なせう、お出なせう」

の畠を見たり、お出なせう、お出なせう、お出なせう

デコ坊「お急いで出て来なせう」

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう

お急いで出て来なせう、お急いで出て来なせう



てすから日本人である以上は海を恐れてはなりません、こんな荒波にも屈せず高波を乗破え乗  
越え、小さな船でどこまでも走つて行くべきです。我國の生命線であるこの父島は、大洋の真中を  
怒涛にもまれる小さい船の様なものであります。我等は共同一致して日本の為この島を立派な  
ものとして行きませう。

### 健康について 奥山正雄

僕は健康を國民の為に一番よいこと、思ふのであるが、この島の人は健康と云ふものには  
つきりわかつておなれと見えて、今この健康を増進させる為先生はじめ生徒が毎日一生懸命にラ  
チオ体操をするのに、大人の人にはあまりラチオ体操をしないなりで残念だ。十八日の晩来て見た  
人はわかるであらう。僕は来てみたが大賛成でした。皆さんも養生をしたかつたらラチオ体  
操をしませう。

### 我等の覺悟 佐藤平次郎

我等は高等一年になつたのだから、正しい立派な行をして下級生の模範とならなければならぬ  
責任がある。悪い事を下級生にして見せれば、下級生が悪くなるはかしてなく、学校の不名誉と  
なる。だから悪いことは自から進んでやめ、正しい事は自から進んでやらねばならぬ。此の非常時  
に我等はこそつて國の為につくし、此の大村小学校の譽をあげてやう。スバル夕人付七歳にな  
れば、武士の教育を受ける為にきびしい訓練を受け、自分の家に歸ることを許されなかつた。それ  
から見ると我等はスーと幸福だ。我々もスバル夕人に負けない様にしつかり努力しよう。

## 高二 健康

西村正一 凡そ此の世の中で或特別の父等を除いた外は誰でも死より恐ろしく いやな  
ことはないだらう。あの一休和尚でさへ臨終の際には「死にたくない」と言ひつゝ死んだ  
さうだ。我々は此の恐ろしい死を出来るだけおくらせるとはどうしたらよいか、それは唯衛生  
の一語を以て答ふる外はない。今大村には「デング熱」が流行してゐる。だから尚更我々にとつ  
て衛生は大切なことなのである。衛生は決して難しい事ではない。我々が朝起きて歯を磨いて  
顔を洗ふ。之は皆日常行つてゐる衛生である。それならば之だけであの病魔に打勝つことが  
出来るかといふと決してさうではない。今や我々高等科生は警察署長及び役場の方々の指導  
のもとに防蚊日なるものを行ひ蚊を退治して病魔「デング熱」を撲滅しやうとしてゐる。村民は  
防蚊日をよく理解し共に之を行はなければならぬ。さすれば村民の健康は保持され延びては  
國防上に影響するであらう。

### 笹本文慶

此の世に生存してゐるあらゆる動物は何でも健康が大切で中でも人間に  
は数多の傳染病が流行し、もし健康でなかつたら我々人間は死を早める結果となるであらう。  
さうしたら人間をはじめ動物は此の地球上に生存し得るだらうか、それを思ふと誰しも健康の  
体になりたいたらう。それではどうしたら健康体になり得ることが出来るか、ふんから清潔  
を守り汚物などをみだりに捨てず、ラチオ体操も毎朝行ふやうにしたら病氣になることはめづ  
たにないだらう。もし不幸にしてかゝつたら何より醫局を見てもうか醫者の云はれることをよ  
く守らば、たいがいはたすかみだらう。このやうに健康であつたら早く親に死別したり兄弟に

死別するやうなこともめったにあるまい。又病氣の爲めに家がこびるやうなこともなく、如何に人間が楽しく生活出来るかゆからない。

石津俊彦

人間は健康なれと云ふ。これは事實であらうと僕は思ふ。健康なれば一日々々を面白くすごしてゆく事が出来る。若し健康でなくは如何なる如何なる希望を起しても身体が弱くては學問をして長く續きはしない。必ず途中で倒れるに違ひない。そこへゆくと少しは學問がなくとも身体が健康である方がよきはならないだらうか。と思ふ事がある。さうだ人間は唯健康だ。學問は何時でもやれば出来る。だから國民こそつて健康と叫ぶのだ。それだのに大村では健康週間にも余り出る人はおない。實に悲しむべき事である。これからは皆すくんでやるやうにしたらよいと思ふ。

川崎すま子

國防健康上といふ誘ひがあるやうに或は健康を丈夫にせねばならぬ。國民が全部健康であるなら國家もしかりしてくるであらう。何故ならば、戦争といふ場合にも、体が弱かたならば、國は危険である。だから今から、体を丈夫にして、事の起つた場合にそなへよう。体を丈夫にするには、飲食物に氣をつけ、常に衛生をとおもひ、ラジオ体操のやうな適當な運動を怠らぬやうにする。だからどこでも健康週間をもうけ、村人に参加をすすめ、一週間ラジオ体操をする事になった。病氣になりはじめて、健康のありがたさがしられる。全村民そろつてラジオ体操といふこともある。それ故、病氣にならぬ内、予防するが肝要である。

操一、二三

の発展を期せねばならぬと考へます。今回は女子部の人名を報告いたしまして更に色々お力をお願ひいたしたく存じます。申すまでもなく日本では「子宮」と申しまし、この總會を以て女子部だけは大事に育たてると云ふのは此の子供を以て自分、高志祖先の心先祖々の忠告を精念願にして来たのです。其の室の中心の大いなる室、青年男女は日本の室、大村の室であり、此の室は、持ちつた水に育つる水、室の中心に立たすかはお互各父兄と指導の任にある人々の責任でありませうか。一般村の人々が御後援下さるだければ決して思ひまの成績を上げることと云ふ事も、さうを皆々人お祈りをお願ひいたします。幾重にも。

本科第二等

本科第一等

- |        |       |       |       |       |
|--------|-------|-------|-------|-------|
| 菊池つね子  | 菊池初枝  | 奥山紀子  | 山田清子  | 水村ハキ  |
| 田山久    | 浅沼タツ子 | 屋代花遊  | 佐藤園子  | 佐々木タキ |
| 稲田はつ子  | 沖山光彦  | 河野ま由工 | 小林富貴  | 浅沼あけ子 |
| 佐々木ヨシ子 | 鷗飼幾子  | 研 究 科 | 大友光子  | 浅沼里子  |
| 菊池英子   | 大川 富  | 佐々木菊美 | 島山茂子  | 河野安子  |
| 佐藤ゆき子  | 佐々木房子 | 田代フミ  | 菊池文枝  | 浅沼恵子  |
| 浅沼タツ子  | 小沢トキ  | 宮内美代  | 川島いづ子 | 大村タツ子 |
|        |       |       | 浅沼ゆき子 | 浅沼タツ子 |

山田 介子 青 杉科 戎 治七かこ 園山 杉江  
 海田 つる 池山 タツ 赤井 静江 永野 小月  
 寺元 とし子 徳本 甘之カ 木下 ミツコ 石井 柳江  
 村田 マミ子 西脇 正子 菊池 栄子



大村

十一月一日... 大村 大村山神社... (誰でも知らずにはありませんが)

大照皇大神に遷回... 天照皇大神に遷回... 天照皇大神に遷回... 天照皇大神に遷回... 天照皇大神に遷回...

大社宮種... 水天宮... 神皇正統記... 神皇正統記... 神皇正統記...

◎おまつりについてのちゆらい◎

おみこしが出ますから近きつてしままになつたり、けがなどを  
 しないやうにきをつけておくこと。

一 おみこしをかつぐ人は十分きをつけて奉仕すること。

一 おまつりだからといってあまりにごちさうを令良べすまで

腹をこはさないやうにすること。

一 とうろうがたくきくつきますからいたづらしなことを。

一 あまり夜おそくまであそんでゐないこと。

三日には防護團の射撃手會がありますからあつたない

ところへ入らぬやうによくと氣をつけてませう。

十月ヨヨシの抜き書

十七日 神嘗祭

十三日 明治四十一年十月十三日  
明治天皇宸甲詔書下賜

三十日 明治二十三年十月三十日  
明治天皇勅語下賜(教育)

民間では  
二十日 忍びす講

昭和拾年拾月

